

# 森瀧市郎研究覚書その二

——「中動態の哲学」を経由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート——

柳瀬善治

はじめに

前稿（「森瀧市郎研究覚書——バトラー研究と日本倫理思想との比較を中心に——」、『原爆文学研究』一九二〇二〇・一二）では森瀧市郎の戦後のバトラー研究と日本倫理思想史との関係について論じた。本稿では森瀧の戦前の哲学研究と戦後の仕事との共通性と差異について、前稿で論じきれなかった問題（田辺元との比較）も含めて論じ、さらに「中動態の哲学」（國分功一郎）をはじめとする近年の哲学研究の成果を補助線とすることで、私のこれまでの原爆文学研究の論考への架橋を試みたい。

## 一 森瀧の戦前の論考について

森瀧市郎が戦前に広島文理大学・広島高等師範学校精神科学会発行の雑誌『精神科学』に発表した論考は以下の五つが確認できる。

- ① 森瀧市郎「プラトン哲学に於ける三つの道」『精神科学』（広島文理大学・広島高等師範学校精神科学会発行）第一巻 一九三三年（以下 第一論文と記載）
- ② 森瀧市郎「福德一致の説」『精神科学』第一巻 一九三五年（以下 第二論文と記載）
- ③ 森瀧市郎「分の倫理 人倫的道德の一素描」『精神科学』第二巻 一九三六年（以下 第三論文と記載）<sup>(1)</sup>
- ④ 森瀧市郎「自利と義務 シジウィック倫理説の中心問題」『精神科学』第三巻 一九三七年（以下 第四論文と記載）
- ⑤ 森瀧市郎「自利と義務 シジウィック倫理説の中心問題」『精神科学』第一巻 一九三八年（以下 第五論文と記載）

前稿で論じた森瀧の戦後の論文については以下のように表記する。

⑥森瀧市郎「シユネイデシス——バトラー良心論研究序説」(『哲学』第三輯 広島哲学会編 一九五二年二月) 以下「第六論文」と記載

⑦森瀧市郎「バトラー良心説の考察」(『哲学』第四輯 広島哲学会編 一九五四年六月) 以下「第七論文」と記載

⑧森瀧市郎「バトラー良心説の考察——アングロサクソンの理性の二元性の根源について——」(『広島大学文学部紀要』第九号 一九五六年三月) 以下「第八論文」と記載

⑨森瀧市郎「バトラー良心説の考察——実践理性二元論の精神的解釈——」(『広島大学文学部紀要』第一号 一九五六年八月) 以下「第九論文」と記載

(なおいずれも引用に際して原文の旧字旧かな遣いを新字新かな遣いに直した。)

第一論文は表題の通りプラトン哲学についての検証であり、プラトンの対話篇に見られる三つの道、理想篇における「知の道」饗宴篇に見られる「愛の道」、パイドン篇に見られる「死の道」の「内面的関係」を論じたものである。第一論文はプラトン哲学の概略と云つてよい論の筋道であり、特に破綻もない代わりに取り立ててオリジナルティは感じられない。

だが、第二論文になると様相が変わる。第二論文では、「健全な道徳的常識」が「福德一致」を求める「素朴的信仰」(第二論文六九頁)を持つという前提を立て、幸福と道徳が一致するか否かを「倫理的考察」の論議の中心とみなす。そこから西洋倫理学史での幸福と道徳に関する考察を、古代のギリシャ哲学、近代のイギリス

功利主義哲学とカントの道徳哲学を例に挙げて分析し、ストア派とエピクロス派の間で自己の徳を意識することが幸福であるとする(徳が最高善であるとする) 説と自己の格率が幸福に導くことが徳である(幸福が最高善である) という説とに分かれ、この両者をいかにして総合するかがカントの「純粹実践理性の弁証論」の中心課題であったとする(七三・八〇頁)。そこからストア派とエピクロス派の対立をより鮮明にしたのがカントの道徳哲学とイギリス功利主義哲学であり、イギリス功利主義哲学で「公共の最大幸福と自己の最大幸福との結合は如何にして可能なるか」という問題」がベンサム、ミルなどの所説の検証を通じて論じられ、カントの純粹実践理性は現世においては不可能な「無限の精進」、すなわち「靈魂の不滅」、およびそれを支える「神の存在」によつてはじめて可能となるとする(八一・九一頁)。

そして第二論文の結論において森瀧は、この西洋倫理哲学史のポリアは西洋思想が個人の存在を前提に福德一致を考えることに起因するとし、そのアポリアを乗り越えるために「我が徳行と子孫の幸福との一致」(九二頁)「祖孫一体的一家の生命の上に求められる一致」(九三頁)を旨とする東洋思想に可能性を見出そうとするのである。

第三論文は「一切の人間の規範の最も具体的渾一的表現とも言うべき語韻」(第三論文四九頁)を持つ語として「分相応」「分際」に使われる「分」をあげ、「その主観的側面を辿り行けば我が最内奥の無私其真心若しくは絶対心の姿に達し、他方その客観的側面を辿り行けば人倫名分礼制典則国教国体の真相に至るは非ざるか(四九頁)」という仮定の下に論がたてられている。森瀧は「分」

は「個々人々の具体的特殊のなる義務の活規範という意味」（五一頁）であり「相対有限」であるがゆえに、そのままでは「普遍性・絶対性」を持ちえないとしたうえで、「何を分とするかの内容対象に求められずして、如何に分を執るかの形式態度心術に求められる」（五三頁）として、「分」を規範の形式として捉えようとする。

こうした道徳規範をその形式面から把握しようとする態度は森瀧も言うように（五四頁）カント的であり、具体的な個人の実践から規範を取り出そうとするところはイギリス経験論的であるが、森瀧はそれを「この国の教」「国体」（五六頁）「我が国民道徳」（九三頁）にそのまま直接つないでしまう。この当時の森瀧の理論には西田の「限定」や田辺の「媒介」に該当するものがなく、実在の政治体制を普遍や規範とイコールとみなしてしまふ危険性を孕んだ論理となっている。

この時期の森瀧の仕事を検証した論として山内廣隆の研究があり、山内はこの時期の森瀧の議論を「シ、ジウ、ウィ、ク、倫理学を強引に自分の中に取り込む（傍点原文）」<sup>53</sup>のものであるとし、「国体思想家」「過剰な理想」と呼んでいる<sup>54</sup>。さらに山内は、森瀧の戦前の思想と戦後の思想の両者に共通する理念の過剰さに戦前（皇国史観）と戦後（絶対否定）の連続性を確認した——「戦前も戦後も国民に過剰な理想を要求する」という点において、戦前の国体思想家としての森瀧も戦後の平和運動家としての森瀧も変わらない、同一である（傍点原文）——うえて、その理想の質には「人類が希求する善」と「狭いナショナリズム」との差異があると述べている<sup>55</sup>。この点は、先の拙稿で論じた田辺の戦前の陥穽ともなった家族（種）と国家（類）との論理的な関係、および類を実在の国家と同一視する事

の政治的危険性の問題と同様であり、山内は田辺についても同様の視点から批判的読解を行っている<sup>56</sup>。

戦後の森瀧の「原子力時代に於ける新しき道徳」で提出された「類的全としての「人類」とか「世界」とか言うことはむしろ理念であり限界概念でしかなかった。然るに原子力時代に入った途端に類的全たる「人類」や「世界」は単なる理念（イデア）ではなくして、れっきした実在（レアル）となつて来た。蓋し原子力の使用をあやまれば「人類」が減じる可能性が起つて来たからである。

「人類」は今日明かに生死の運命を共にする運命共同体であり、「世界」は一つの共同生活場面となつて来たからである<sup>57</sup>。という問題意識、さらには「ラッセル博士との会見」での「即ち「類」の立場である「人類」とか「世界」とかいうものもはや理念的なものではなく、痛切な運命共同体として現実の存在となつたということが原子力時代の最も大きな特色であり、今日「世界」「人類」は原子力の正用か誤用かの運命を共にしているので、かつて「家族」や「民族」が運命共同体であつたと同じ程度に「人類」が運命共同体となつて了つたのである<sup>58</sup>。という問題意識は、森瀧の戦前の自らの仕事において「類」を安易に実在の日本国家に接続してしまつた論理を批判するためのものとみなしてよいだろう。

戦前の森瀧の仕事に見られるこうした東洋思想史との比較を通じて西洋思想史を意味づける論展開は、『忠孝論』をはじめとする岳父西晋一郎の日本倫理思想史研究の仕事の影響があるものと考えられる。西の倫理学は日本だけでなく、中国、古代ギリシャ、ヨーロッパの思想史を自在に往還するものであり、このスタイルもまた森瀧に影響を与えたと思われる。

ただ、西の読者をうねりの中に巻き込むようなリズム感あふれる能弁な文体<sup>9)</sup>と比べ、森瀧の文体は、擬古文体であった戦前においても一つ二つの概念を丁寧に定義して積み重ねていくものであり、そこには彼固有の思考が刻まれている。戦前の仕事においても森瀧は完全に西の影響圏のなかのみにいたわけではないということであろう（この文体と思想の問題については、後に西田幾多郎の文体を例に出してもう一度扱う）。

前稿でも触れたが、森瀧の教え子にあたる行安茂は森瀧本人から聞いた話として、「先生ご自身がいつか「西さんから英国倫理学をやってみないか、見るところがあるよ」といった意味のことをいわれたのを私は記憶している。先生の英国倫理研究の動機をつくったものは、西晋一郎の助言にあったのだらうと思われる」と述べている<sup>10)</sup>。すでに戦前の段階から森瀧の論文で英国倫理思想史が扱われていることから、西の森瀧への助言は戦前の比較的早い時期であろう。

戦前の第四論文、第五論文では『シジウィックの『倫理学の諸方法』の検討を通じて、バトラー理論の重要性が語られており、戦後の第六論文以降の森瀧の仕事を見させるものとなっている。

第四論文では、『シジウィック『倫理学の諸方法』の第六版序文（シジウィックの自伝的ノートの一部をコンスタンス・ジョーンズが採録したもの）がほぼそのまま森瀧の手によって訳出されており（八九・一〇三頁）、そこでのバトラー評価が森瀧のバトラーへの注目を促す要因となっている。

第六版序文の内容は、最初は、当時の直観主義な倫理学の理論

的な不十分さを批判しているという理由でミルの功利主義を評価していたシジウィックが、ミルの議論を補完する必要性からカントの道徳哲学（『道徳形而上学の基礎付け』）での定言命法の第一定式（森瀧の訳では「無上命法の第一方式」）に注目し、さらにそこからバトラーやアリストテレスの理論を涉猟して、当時の道徳理論への反省的な考察を行うという彼の方法論を示したものである<sup>11)</sup>。この『倫理学の諸方法』第六版序文については、現在のシジウィック研究でも重要な論点とみなされていて森瀧の着眼が確かだったことがわかる<sup>12)</sup>。

この二つの論での議論はシジウィック『倫理学の諸方法』の詳細な解説といつてよい内容であるが（そのため東洋思想や日本の国体などとの比較は行われていない）、戦後の第六論文以降の「良心説」や「実践理性二元論」への考察を見させるものであり、森瀧が西の影響下から脱しつつあることがうかがわれる。

## 二 「存在の比論」から固有名の哲学へ

本節では、前稿で論じきれなかったいくつかの論点について補足的な説明を加えることとする。それらの論点とは以下のとおりである。

① 田辺と戦前の森瀧の陥穽ともなった家族（種）と国家（類）との論理的な関係、および類を實在の国家と同一視する事の政治的危険性の問題

② 森瀧がバトラー解釈において重視した「存在の比論」の哲学史

## 的な意義の問題

### ③「原爆という悪」の問題にもつながる悪と自由の問題

①の論点については先の節で触れたので、ここではまず②の論点について述べることにする。

②の論点である「存在の比論」は、森瀧の第九論文においてバトラーによる「実践理性の二元性の神学的解決」と関連して提出された論点である。実践理性の二元性、すなわち良心と自愛の二元性を、シジウィックは哲学的吟味を通じて、功利主義的義務と自己利益との完全な一致は法的制裁、社会的制裁、共感の原理のいずれによっても期待されず、宗教的制裁でも二元論は解決されないとした。このシジウィックの哲学的検討は森瀧の第四、第五論文で詳細に論述されているものである。

これに対し、バトラーにおいてはいわば神学的な解決が目指される。バトラーが用いるのが「存在の比論」という方法であり、「自然の構造と過程とからの類比」によつて「世界の神的支配」が比量される（第九論文七八頁）。これは「類比的認識」が「その本性上蓋然的」で「一定度の蓋然性の上に立つて「信ずる」より他なき認識」であるとともに「斯かる認識が実践的立場からは吾々にとつて実に貴重なる案内者たる」とする。それは人間の認識の限界を示すと同時に完全な認識は神の領域に属するからである。このバトラーの論理には、L・ステューブンスが『十八世紀イギリス思想史』で有限な存在者の行動に適応されるカテゴリー（賞罰）を無限な存在者に適応するという誤謬を犯している（正義か不正義かという言葉はすべての原因である神に対しては意味を持たない）と批判を向けて

いることはすでに前稿で見た<sup>(13)</sup>。有限な人間の側から無限な存在者を証明することは実際にはできない。だからこそ、森瀧はバトラーを通じて人間理性の限定性から「蓋然性」の必然性とその議論における可能性を見出そうとしたのである。

こうした「存在の比論」の論理は、田辺元がその戦後の仕事、スピノザとハイデガーへの批判を含む「哲学と死と宗教」の中で重要視した論点である。「神と無限様態に対応して、無限様態の全体と有限様態の交互体系とが、一即多、多即一の比論を形作る」「スピノザの形而上学的体系」を「正に「存在の比論」に立脚する」<sup>(14)</sup>とした田辺は「絶対者たる神と相対者たる個体との間に否定的媒介を認めずして、いわゆる比論という、緩和せられた同一性を、両者の間に直接に設定しようとすることである」「存在の比論」は弁証法の正反対<sup>(15)</sup>であるというのが田辺のスピノザ批判の中核にある<sup>(15)</sup>。

この田辺の論理については、合田正人が田辺の「種の論理」の根幹にある「イデヤの分有」は、存在の比論と表裏一体の関係にあるのではなからうか（田辺には：引用者注）関係の非対称性・非相対称性を類比による序列化に転じた発言がしばしばみられる」と批判している<sup>(16)</sup>。

この合田の批判はバトラーの「比論」を肯定的に論じた森瀧にそのまま当てはまる批判であろう。「関係の非対称性・非相対称性を類比による序列化に転じ」る思考というのは、山内が論じたように、そのまま「日本」とその他の国・地域の文化や思想を序列化し、「日本」を優位においてしまうという戦前の西や森瀧が陥った思考にながつてしまうからである。つまり「比論」の温存はそのまま序列

化による差別へと反転しうる。

では「比論」に支えられず、かつ「関係の非対称性・非相等性を類比による序列化に転じることなく論じるにはどのような論理を構築すればよいのだろうか。

合田は田辺の『哲学と詩と宗教』での「個体」概念の取り扱いに関連して「此者性」(haecceitas, this-ness) という概念に着目している。トマスとスコトウスによって議論されアリストテレス哲学においても扱いきれない(形相でも質料でもない)とされる「個体」を論じる際に田辺は「特殊化の極限としての個別性を規定する形式として立てたところの、いわゆる「此者性」<sup>(17)</sup>に言及している。

「此者性」は中世スコラ哲学に由来する概念であり、國分功一郎は自身の中動態研究の文脈<sup>(18)</sup>でこれを「ほかならぬこの個体、取り替えがきかないこれとしてこの物やこの人を見るとき、そこにはこの性が見いだされている」「固有名によって名指される個体にはこの性がある」と説明する<sup>(19)</sup>。

「此者性」＝「この」性はかけがえのない固有名の単独性(確定記述によって回収されない)によって表象されるのである。前稿でウィトゲンシュタインに言及したが、ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』で問われているのも、命名と記号、そしてその背後に想定しうるかけがえのない「この私」の存在である<sup>(20)</sup>。

國分は「此者性」＝「この」性とその確定記述に回収されない過剰さについて述べる際に綾屋紗月の当事者研究での例を挙げている。それは綾屋が彼女の世界知覚において「つねに大量の刺激が等価に意識に上つてきて、しかもそれが意味のまとまりにならないままに、生のデータの感覚に近いものとして意識に浮上する」、す

なわち「あらゆるものが「この」性」を持つものとして経験される状況にあることをあげている<sup>(21)</sup>。

この「あらゆるものが「この」性」を持つものとして経験される」＝「つねに大量の刺激が等価に意識に上つてきて、しかもそれが意味のまとまりにならないままに、生のデータの感覚に近いものとして意識に浮上する」状態というのは拙稿の吉本論において田中純の「パラタクシス」論——「画面全体の統一が解体されて、各要素が並列的に振動しているような」「言語表現の統語論的総合や階層的秩序を宙吊りにする」「中断としての並列」——を援用しながら述べたような被爆者の記憶を想起させる<sup>(22)</sup>。いわば被爆者の記憶においてはすべての事象が一般化・形式化できない、「言語表現の統語論的総合や階層的秩序を宙吊りにする(つまり「比論」による序列化が発生しない)「過剰な「此者性」＝「この」性」を帯びたものとして想起される。そうした記憶の中では田中が「各要素が並列的に振動」し「イメージのあらゆる細部が意味作用を始める」と述べるように<sup>(23)</sup>、あらゆる細部が意味作用を始めることで物語が作動しなくなり、吉本隆明の言う「意味的な喩」と「像的な喩」<sup>(24)</sup>が分離できずすべてが「意味＝像的な喩」としてしか認識できなくなる。

この観点から、たとえば栗原貞子とその詩作品において「ヒロシマ」という呼称を使い続けた理由も解釈できる。栗原は「ヒロシマ」と呼ぶことで「広島」という固有名に原爆体験の過剰な「此者性」＝「この」性」を帯びさせようとしているのである。だからこそ栗原の詩は言語表現の統語論的総合や階層的秩序を宙吊りにする過剰な「此者性」＝「この」性」を帯びた被爆者の記憶を表象す

るために、「あらゆる細部が意味作用を始める」「意味＝像的な喩」でなければならぬのだ。

森瀧＝田辺の「存在の比論」は、中動態研究を通じて新たな固有名「此者性」＝「この」性」の哲学へ、その先にある原爆文学研究の新たな視角へと書き換えられる必要がある。

### 三 悪と自由の問題——田辺哲学という補助線——

三番目の論点である「悪と自由」については田辺哲学を補助線とする。この文脈では、村井則夫が田辺哲学の絶対弁証法の媒介性を中動態と結び付けた分析がある。

村井は「関係の自己生成でありながら、その関係自身の自己言及的な自覚をその内部に逆説的に取り込むことが媒介の特性である」とし、「中動態においては、主語は単に動作を引き起こした外在的要因としてではなく、当の動詞の主体かつ当事者として構成される。それと同時に媒体においては、媒体の遂行主体はその行為の自己言及性の中で、初めて当の媒介行為の主体として成立する」と論じる。<sup>(25)</sup>

これはバンヴェニストの定義、「能動態においては、動詞は、主辞に発して主辞の外で行われる過程を示す。これとの対立によって定義されるべき態であるところの中動態では、動詞は、主辞がその過程の座である様な過程を示し、主辞の表すその主体はこの過程の内部にあるのである」<sup>(26)</sup>をうけたものであり、中動態の論理が田辺の哲学の語彙で説明可能であることを示唆している。<sup>(27)</sup>

國分はこの点を「中動態は、主語が「する」のか「される」のか

を問う能動対受動のパススペクティブではなく、主語が過程のうちにあるのかを問う別のパススペクティブにおいて理解されねばならぬのだ。ならばその中動態が過程を実現する力のイメージをその内に宿していることは別におかしなことではない」と説明している。<sup>(28)</sup>

田辺の悪と自由の扱いについては、田口茂の論文が参考になる。

田口は、田辺における実践理性の問題について、田辺が『ヘーゲル哲学と弁証法』においてカントに触発された形で道徳論・自由論を展開し、「行為」とそれを遂行する「身体」への問いが「いまこの瞬間における身体的な行為が、善と悪との旋回点に立ちつつ、何の変哲もない現在を普遍的な道徳性の極微の実現へと反転する」という「倫理的」特徴を示していると論じている。<sup>(29)</sup> 田辺の問う倫理は善悪の臨界点に立つ身体性により担保されているのである。

田辺の『ヘーゲル哲学と弁証法』でのカントの道徳哲学理解は「個性は飽くまで現象の人間の経験的性格に成立するものであって、道徳はこの質料的緊縛を脱却することに由り睿智の世界に成立する」とする「二世界主義」とみなすものであり、これは森瀧がシジュウツクを通じて掴んだカント理解——「実践理性の二元性」——にも通じるものである。シジュウツクは「本当に自明と思われる直観的真理」<sup>(30)</sup>という哲学的な解決法によって、パトラールは「比論」という哲学的な解決法によってこの二元性を統合しようとし、森瀧はその理解を踏襲している。

しかし田辺においては哲学的直観は厳しい批判的考察の中に置かれ続ける。初期の『数理哲学研究』（一九二五）執筆は一九一四・一七）では「直観」は「思惟を動かす創造的で生産的な」もの

として把握され、『ヘーゲル哲学と弁証法』の段階では、「現実」の多層的な「媒介」性に対して直観が不可能であることが気づかれ始める。<sup>(61)</sup> 田口が明晰に論じているように、田辺の理論体系においては、この「現実」の「媒介」性と「絶対的な矛盾・分裂の：引用者注）交互転換の媒介」としての「身体」の発見とが原理的につながっており、そうした身体によって行為、そして行為と認識のずれがもたらす倫理性の重要性が浮上するという論理構成になっているのである。<sup>(62)</sup>

そして、田口の指摘で重要なのは、田辺が『ヘーゲル哲学と弁証法』において哲学上の「個体」を論じながら「悪の自由」「悪の可能が個体性の徴証である」と論じた点を指摘していることである。「個体」については先に二節で「此者性」との関連で論じたがここでは「個体」は自由と道徳の問題の核心、「個体こそ道徳の依って立つ枢軸」<sup>(63)</sup>として捉え直される。「悪の自由」は悪に対する自由の可能性を論じたシエリングの自由意志論により担保される。

「個体」は「どこまでも必然に反抗する」「悪の自由」を持ちうる。これは「道徳的行為」を「自由行為」であるところさえ、「相矛盾する行為を反対の両極端として結合する旋回的統一」<sup>(64)</sup>を為すものとして主体を把握してゐる。<sup>(65)</sup>

この問いは個体が偶発性と他者性に絶えずさらされ、その結果、決して悪の存在（たとえ「原爆という悪」ですら）を回避できないことを示す。あらゆる他者性と外界の刺激を許容する個体の「此者性」＝「この」性」は、「悪の自由」を解除する倫理的基準を持ちえないのであり、この点は田口が別の田辺論でデリダとレヴィナスを援用しつつ、「未来と他者に開かれていることは、最善のものと

同様、最悪のものにも開かれていることを意味する」<sup>(65)</sup>と述べるとおりである。

この論ではもうひとつ、プラトンの質料概念に関連して「矛盾の無限なる重量としての混乱激動」<sup>(66)</sup>という後の「種の論理」の力ギとなる（そしてデリダの「コーラ」に先立つ）概念をここですでに提出していることも注目し値する。<sup>(67)</sup>

この論点は「古代哲学の質量概念と現代物理学」でさらに深められ、次のように述べられている。

斯くして、単に非有非存在として場所乃至空間と同一視せられるプラトンの質料が、今日我々の空間とか場所とかいう概念に由つて思惟する如く単に空虚なる受容者を意味するに止まるものでなく、その場所は、受容者であると共に、其処に受容せられるものを反対の方向に分極し動揺せしめる対立葛藤の原理なることを知らしめる。<sup>(68)</sup>

シエリングが其自由意志論に、プラトンのティマイオス篇の質料を、「激浪逆捲く大海」に比したのもその為の外ならぬ。<sup>(69)</sup>

即ち質料を空間と解するならば、その所謂空間は無記一樣なる幾何学的空間でなくして、異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間でなければならぬ。<sup>(40)</sup>

このような「受容者であると共に、其処に受容せられるものを反対の方向に分極し動揺せしめる対立葛藤の原理」、「異他的分化、



対立的分離の機能を有する力学的空間」が田辺の倫理学、自由論の根幹にあることは重要である。絶対的な媒介性を要求する田辺の倫理学は、決してスタティックな倫理的基礎に立脚していない。彼の倫理学は田辺の言葉でいう「力学的」ダイナミック」な性質、絶えず他者性のただ中で振動し続ける性質を持っているのである。田辺の倫理学がこうした絶え間ない動性の中で成立していることはのちに見る「中動態の哲学」を念頭に置いたとき、改めて検証し直す必要がある。

#### 四 中動態研究と原爆文学研究との接点

##### ——倫理性と構想力の交錯——

原爆文学研究において中動態という記述の重要性を示唆したのは J・W・トリートの『グラウンド・ゼロを書く』である。トリートは中動態による歴史記述のビジョンとして「文字的なものと像的なものとの間の、また、主観性と客観性との間」を描くものであり「虐殺自体はもちろん、その歴史的コンテクストも消し去ることなく、しかも私たちの紋切り型の表象に回収されないような、ポスト虐殺的な観点であり、また個人的でも社会的でもありながら、私たちの個人としての存在とも、私たちが共有する体験とも違う、ナラティブの中心となる場」の必要性を説いている<sup>(41)</sup>。

ここでトリートが参照している中動態解釈はヘイドン・ホワイトの「歴史のプロット化と歴史的表象をめぐる真実の問題」論文<sup>(42)</sup>の解釈であり、ホワイトはロラン・バルトの「書くことは自動詞か？」をその理論的靈感源としている<sup>(43)</sup>。

先に二節で触れたが國分功一郎は中動態について綿密な哲学的検討を行っている。國分はホワイトの解釈をバルトの文章を比喩的に理解したのみでバンヴェニストの言語学的検証をふまえずになされたものだと批判しつつ<sup>(44)</sup>、バンヴェニストとハンナ・アーレントの所説、そして日本の細江逸記の論を押さえながら<sup>(45)</sup>、西欧思想史における中動態の文法理論からの消滅と意志の哲学の発生が同時並行であるという刺激的な説を提出している<sup>(46)</sup>。

「能動と受動に支配された言語」により、行為の帰属が問われ、そこから哲学的な意志の概念が発生したことで、「出来事」の水準が十分に問えなくなると國分は述べる<sup>(47)</sup>。ハイデガーとドゥルーズの議論の詳細な検討を通じて、國分はこれまでの哲学が実体を名指す名詞を重視するものであり、それに対してドゥルーズは「出来事」という「能動的でも受動的でもない存在の様態を扱う（傍点原文）」ための新しい哲学言語が必要となったのだとし<sup>(48)</sup>、そのヒントをドゥルーズの動詞と不定法の検討に求め、さらにそうした思想による世界表象としてスピノザの「神」（自らを刺激しつつ、刺激を受けることができる状態へと生成するという中動態的な過程のなかにある）を、人間の「様態」の本質を「様態の諸部分間の関係を一定の割合で維持しようとする力」＝「コナトウス」をあげている<sup>(49)</sup>。

さらに國分が障害者の当事者研究者の熊谷晋一郎と行った当事者研究への応用はより大きな思想的文脈への応用可能性を秘めている。

すでに述べたように、國分は「此者性」≡「この性」について「（自閉症スペクトラム障害当事者にとって…引用者注）すべての知覚、外的な刺激が等価なものとしてやってくるということ」は、あらゆるもの

が〈この性〉をもつものとして経験されるということです」とし、通常はカントの言う図式化によって多様な刺激が一般化されるのに対し、それがうまく働かないケースがありうるのだと述べている。<sup>(50)</sup>

國分は「あらゆるものが〈この性〉をもつものとして経験される」状態をドゥルーズ・ガタリの用語を借りて図式化を成して一般化した刺激を「モル的」、「あらゆるものが〈この性〉をもつものとして経験される」状態を「分子的」と区分している。この二つの区分は『ミル・プラトー』に起因するものであり、『ミル・プラトー』では「人称や主体、あるいは事物や実体の個体化とは全く違った個体化の様態」を「此性」(haecceitas)と位置づけ、そしてそれが成立する「情動と局所的運動、そして微分的な速度しかない」平面を「存立平面」(plan de consistance)と呼び<sup>(51)</sup>、「此性」には始まりも終わりもないし、起源も目的もない。「此性」は常に〈ただなか〉(au milieu)にあるのだ。「此性」は点ではなく、〈線〉のみで成り立つ。「此性」はリズムなのである」と論じている<sup>(52)</sup>。ここでの〈線〉は、ドゥルーズがマイケル・フリードのジャクソン・ポロック論<sup>(53)</sup>を補助線として、「平滑空間」を描くための〈線〉として提出しているものである<sup>(54)</sup>。つまり、「平滑空間」と〈此性〉と「リズム」は対応関係にある概念であり、「此性」は常に〈ただなか〉(au milieu)にある」という一節は中動態が主体を過程の中に置くものであるという理解と対応する。中動態は〈此性〉を表象する装置であり、かつ「平滑空間」を描くための〈線〉によって表象されなければならないのである<sup>(56)</sup>。

(ドゥルーズ・ガタリは「此性」の例としてヴァージニア・ウルフのテクストを例に挙げている<sup>(57)</sup>。)

國分が中動態研究の文脈から再評価するカントの図式・構想力については合田正人がハイデガー・カッシーラー『ダウオス討論』の対話に触れながら図式論と倫理性(実践理性)の間の関係性について興味深い見解を述べている<sup>(58)</sup>。

(カッシーラーは：引用者注)だがカントは倫理的なものにおいて図式論を認めなかった。というのも我々の自由概念は：認識(Erkennisse)ではなく透察(Einsichten)であって、この透察は図式化されないと語っているからである。理論的認識の図式論は存在するが、実践理性の図式論は存在しない<sup>(59)</sup>。

カッシーラーが非感性的で無限なものの領域である「実践理性」に関して「図式」と「類型」を峻別していたのに対して、ハイデガーは「実践理性」「定言命法」も、「有限性」を単に乗り越えるわけではないとの立場から「図式」と「類型」——例えばパウロのいう「型」「予型」——との繋がりを示唆している<sup>(60)</sup>。

この引用に見られるように合田はハイデガーが、カッシーラーが認めなかった実践理性(倫理性)での「図式論」への可能性を認めると指摘している<sup>(61)</sup>。

森瀧がジジュイックとバトラーを通じて確認したように「くすべし」という定言命法は有限性を越えるものである。しかしハイデガーは人間存在の有限性と存在を了解することの無限性との関わりを認める。そして「カントが図式作用を行う構想力を根源的開示

exhibito originaria「の能力」として特徴づけている。「構想力において発出したこの無限性は、まさに有限性にとつての最も鋭い論証」<sup>62)</sup>「そして人間がこのような存在了解への開示 exhibito を持つということが、人間の有限性にとつての最も鋭い論証である」と述べる。<sup>63)</sup>これはカントやバトラーとは違った「実践理性の二元性」の克服の仕方である。ハイデガーは人間の有限性に基づく二元論の矛盾と見える箇所を、いわば、その徹底した「開かれ」——「根源の開示」——において再評価しようとするのである。

合田はこのハイデガーの定義——「構想力という隠れた根である技術」——を受け、J・L・ナンシーの定言命法の議論——「そうした命法が不安な動揺をもたらすのはほかでもない、それがあまりに近いからであり、その疎隔においてあまりに隣り合っているからである」——をふまえてそれを「他者の呼び声を聞く」というハイデガー的でもありデリダ的でもあるテーマをそこから引き出す<sup>64)</sup>。この徹底した動揺、不安定性に他者への「開かれ」を読む姿勢は、後述のデリダ『友愛のポリテック』スピヴァク『ある学問の死 惑星思考の比較文学へ』にも通じるものである。

ここで思い起こされるのは森瀧と西がともに影響されたと云っている西田幾多郎の文体と彼の思想との関係性である。

西田の文体については、すでに小林敏明の論をはじめいくつかの検討があり、小林は西田が執拗に同一の主題を繰り返して論じ、そこで異様なほど「あらねばならない」「なければならぬ」を多用する文体を用いた理由を、発話者である西田が何者かによつてまだ見ぬ何かに対して行為を強いられ、励まされるようなものであると述べ、西田の思考と「分裂病者」の思考との類似を述べた木村敏

の研究を受けつつ<sup>65)</sup>、西田の文体は「他者との関係」が「一次的にはむしろ過剰なまでに「開かれて」いる」「他開」の状態を示すものであるとした<sup>66)</sup>。この「他開」の文体がはたして西や森瀧にどこまで読み取ることができののかは改めて問い直されなければならないが、西と森瀧の仕事を徹底した動揺、不安定性をもたらす他者への「開かれ」という観点から読み直すことは重要な課題である<sup>66)</sup>。

## 五 新たななる『ミメシス』Ⅱ「惑星的思考」へ向けて

先に國分によるホワイトへの批判を取り上げたが、ホワイトの論述には國分の引用していない続きがあり、國分がデリダの哲学直観を示すものとして何度も援用する「哲学は、たぶん、或る種の自動詞性を表現している中動態を能動態と受動態とに配分することから始まったのであり、このようにして中動態を抑圧することによつて自らを構成してきたのだった」<sup>67)</sup>を引用した後に、アウエルバツハ『ミメシス』でのヴァージニア・ウルフ評価へと議論をつなぎ、そこでの五つの評価を「バルトとデリダが「中動態的なもの」の文体と呼んでもよかっただろうものについての、ほかにもあるかもしれないどのような特徴付けにも劣らぬ見事な特徴付け」とみなしていることである<sup>68)</sup>。

ホロコーストを表象することをめぐつての議論のなかで出会うのもろもろの変則的なもの、不可解なもの、袋小路は、ホロコーストのような、本性上モダニズム的である出来事を表象するのには不適切なりアリズムにあまりにも依存しすぎている言述

観のもたらしたものだということを示唆したいからである。<sup>(69)</sup>

「歴史のプロット化と歴史的表象をめぐる真実の問題」論文が収録されているホワイトの『歴史の喩法』にはアウエルバツハを論じた「アウエルバツハの文学史——比喩的因果関係とモダニズムの歴史主義」も収められており、ホワイトのなかではこの二つの論は連続した問題意識の中でとらえられている。<sup>(70)</sup> アウシュビッツをめぐるカラストロフの「歴史的表象」の（中動態による表象）可能性を論じることと『ミメーシス』でのモダニズム文学の文体を再考することはホワイトの中でつながっているのである。

拙稿の吉本論で吉本の仕事を日本版『ミメーシス』として理解する説を提出したが、その拙稿で論じたように、吉本版『ミメーシス』を栗原貞子らの原爆文学の営為と交錯させることが、今後の原爆文学研究に必要な試みであろうし、それは徹底した他者への「開かれ」とそこでの倫理性の問題として森瀧の仕事を再評価することにもなるのである。<sup>(72)</sup>

同様に、ホワイトの『歴史の喩法』もまたトリートがなしたような原爆文学研究の領野と交錯させる必要がさらには國分・熊谷が提唱する中動態的思考（による自由と倫理）の可能性<sup>(73)</sup>もホワイトトリートの文脈を超えて追究されなければならないだろう。<sup>(74)</sup> これは前稿で論じた森瀧の、分析哲学と二重写しにされることで見えてくるイギリス経験論哲学の世界を言語（命名）を通して治療する「カ八世紀イギリス倫理思想史は、その背後に現代の固有名をめぐる議論と類比的な理論的困難——名指すことの理不尽さと不可解さが露呈すること——を抱え込んでいるのである。<sup>(81)</sup>

また、この論点はスピヴァクの「惑星的思考」へもつながりうるものである。鶴飼哲はデリダの『友愛のポリティック』を受けてス

ピヴァクの『ある学問の死 惑星思考の比較文学へ』で論じられた議論について、「母」「ネーション」「神」「自然」などと形象化されたものを、「私」や「私たち」の再固有化の欲望から切断し、それぞれに固有な他者性において再考することを命じる名」と述べている。<sup>(76)</sup> しかもデリダの『友愛のポリティック』を受けて「ある学問の死 惑星思考の比較文学へ」でニーチェと並べてスピヴァクが論じ、「文学が私たちをそこへと導いていく、織物のように織りなされた集合体」の可能性を見ているのはホワイトとドゥルーズ・ガタリが着目したヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』なのである。<sup>(77)</sup>

鶴飼が述べる「再固有化の欲望から切断し、それぞれに固有な他者性において再考すること」とは、固有名を一般名という形で再固有化することではなく、その「固有な他者性において再考すること」、すなわち、それぞれの固有名の「此者性」を再考することにより、その上で再び「惑星的思考」という新たな「類」を模索することに他ならない。

また、この固有名をめぐる問いかけは前稿で論じた森瀧、下程勇吉<sup>(78)</sup>、太田可夫<sup>(79)</sup>による名称に関する問いの重なりとも共振しうる。<sup>(80)</sup> 前稿では太田のホップズ研究に関連して遠藤知己がホップズに「名称が「ある」ことの出来事性」その「不可解な理不尽さ」を見ていたことに触れたが、森瀧が学問的フィールドとした一七一一論と類比的な理論的困難——名指すことの理不尽さと不可解さが露呈すること——を抱え込んでいるのである。<sup>(81)</sup>

いわばそれは「言語が言語を無効化する力と拮抗しあう場所」

「死地」の場所」<sup>(82)</sup>において「正名」(大室幹雄)<sup>(83)</sup>を探る試みだが、その試みは唯一の正しい「過剰な理念」(山内廣隆)を妄信することではあつてはならない。それは「原爆体験という出来事」、その過剰な「此者性」 $\parallel$ 「この」性」と「ヒロシマ」・「ナガサキ」という名称が「ある」ことの出来事性」とを問い直し、その先の新たな普遍性を、「善」を構想するための格闘なのだ。

スピヴァクはデリダの「トレイオポイエーシス」<sup>(84)</sup>をフッサールを補助線として拡大し、鵜飼の言う「他我は自我との類比を通して構成されるほかなく、(傍点引用者)、他我ならぬ他者は現象学的明証性においてはけつして直観に与えられないこと(傍点引用者)」、それがゆえに「安定することがなく、友は敵に、善は悪につねに反転可能」<sup>(85)</sup>であるとされる。

ここでスピヴァクが援用するフッサールの概念が「準現前化的な類比 (appresentational analogy)」 $\parallel$ つまり「比論」の哲学と田辺であれば呼ぶであろうもの——であることは興味深い。これは「類比」「直観」の明証性を示すものではなく、むしろデリダとスピヴァクの含意に従えば、「類比」「直観」のその曖昧さ、不確実さを通じて他者を呼び込むしかならないことを示すものである。ここでは、田辺が考察し続けた哲学的直観の不安定さが逆手に取られ、自己の中に無数の他者を呼び込むものとして位置づけなおされている。森瀧がシジウィック $\parallel$ バトラーから引き継いだ「比論」「直観」はむしろその不明瞭さ、不安定さがもたらす動性にくそ可能性が見いだされなければならない(無論、それは田辺が、デリダが、スピヴァクが要求する理論的厳密さの果てに露呈する脱構築的な不安定さであることは言うまでもない)。

スピヴァクの思考を補助線として大田洋子を読解する試みについては本誌一四号の拙稿を見られたいが<sup>(86)</sup>、この「中動態の哲学」を通じて固有名の「此者性」を「惑星的思考」につなげるという論点は「死の同心円」から「平和の同心円」への転換を詠った栗原貞子読解に関しても試みられる必要がある<sup>(87)</sup>。先に二節で触れたように、栗原が「ヒロシマ」「ピキニ」といった固有名を使用するのは、固有名における確定記述に還元できない原爆の記憶の「此者性」(「死の同心円」)を新たな普遍性(「平和の同心円」)に開いていこうという意志の現れである。

そうした新たな普遍性は、むしろ田辺の言う「種」の基礎付けに近いもの、「異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間」の媒介において成り立つものでなければならぬ(西田幾多郎の使用する意味で)。ここでは「主体」もその「直観」も振動し、分化し、分離する。その徹底した動性が過剰な「此者性」 $\parallel$ 「この」性」を他性へ、そして「惑星的思考」という新たな「類」へと媒介する。これはそのまま森瀧と田辺の課題、原子力時代において新たな「類」 $\parallel$ 普遍性の領野を模索しようとした課題へと重なりうるだろう。

真本悠介(見田宗介)は『自我の起原』において、ドーキンスらの社会生物学、進化生物学の所論を検証しつつ主体の持つ根源的な利他性を論じている。

個体は形成され主体化された後も、この幾重もの「自己化」の装置にもかかわらず、なお幾重にも外部の生成子(遺伝子のこと 引用者注)たちに向かって開かれている。(中略)あらゆ

る他者たちや動物たちや植物たちがわれわれの身体にその遠隔の作用をおよぼし、身体がそれらと共に在ることに、時にはそれらの「ために」行動することにさえ喜びを感じるように構成している。<sup>(88)</sup>

そして大澤真幸は見田の議論を受け、その論理を徹底すると利他性が主体の解体（あらゆる他者への「開かれ」）にまで到達すると述べている。

ドーキンスなんかを例にとりながら、真木さんはその論理をどんどん推し進めて行つて、利己性と利他性が完全に一致するところまで論理的には突き詰められるんだとおっしゃっているんだけど（中略）本当に突き詰めたときに、そのテレオノミカルな主体（目的性を持った引用者注）は、むしろ完全に空虚なものになつてしまつて、事実上、自己否定にまで追い込まれるのではないか。<sup>(89)</sup>

こうした主体を解体にまで導くような「利他性」と「根源的開示」との関係がもたらす「倫理」について田口茂は前掲の田辺論の中でのこのように述べている。

悪に対して自らを閉ざすのではなく、むしろ自らを開くことによつてこそ、一切の予期の地平を突き破る法外な善への希望が成立する。<sup>(90)</sup>

無数の過剰な「此者性」＝「この」性」の集合体から成る、「異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間」から立ち上がりうる「一切の予期の地平を突き破る法外な善」。それを表象する〈線〉（ドウルーズ・ガタリ）を可能にする新たななる『ミメーシス』。森瀧と栗原の怒りと希望はこうした原爆文学の可能性を構想することによつて未来へとつなげられるだろう。それをどのように具体化するかが原爆文学の書き手と読み手にゆだねられている。<sup>(91)</sup>

※本稿はJSPS 科研費 19H04422（「原爆報道」に関する基礎的研究」（研究代表者 小池聖一））の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

1 この論について、後述の山内廣隆『過剰な理想 国民を戦争に駆り立てるもの』（見洋書房 二〇一九）では考察の対象としていない。本論文は『精神科学』の表紙には筆者名が「森瀧一郎」となっているが、論文での筆者名は「森瀧市郎」となっており、内容的にも他の論文と重なるので、森瀧市郎の著作として進める。

2 山内廣隆『過剰な理想 国民を戦争に駆り立てるもの』（見洋書房 一九七頁）。

3 山内廣隆前掲書二〇一頁。

4 山内廣隆前掲書二〇一、二〇五頁。

5 山内廣隆『田辺元元政治哲学 戦中・戦後の思索を辿る』（昭和堂 二〇〇〇）。同書では戦中期の『歴史的现实』（一九四〇）と終戦直後の『政治哲学の急務』（一九四六）に対する徹底した読解が行われている。

- 6 森瀧市郎「原子力時代に於ける新しき道德」(『社会科学研究』六一九五八 五八頁)。
- 7 森瀧市郎「ラッセル博士の会见」(初出『広島大学新聞』一九五七年一月五日 引用は森瀧市郎『核絶対否定への歩み』(漢水社 一九九四 一八五頁)。
- 8 むしろ西の文体の読者への喚起力については同時代の文芸批評家である小林秀雄や保田與重郎などとの比較を試みるべきかもしれない。私の小林論、保田論として拙稿「二十一世紀の小林秀雄」に向けて近年の研究史を概観しながら(『国文学攷』二二八・二二九合併号 二〇一六・三)。「異文化間の「架橋」と「日本」の浮上——保田與重郎における西欧のアウフヘーベン——」(『日本近代文学』第五六集 一九九七・五)。
- 9 行安茂「森瀧市郎先生の指導を受けて三八年」(『森瀧市郎先生の卒寿を記念して』一九九一・七 大学教育出版 一五七頁)。
- 10 第六版序文(こゝにはSidgwick Henry The Methods of Ethics Preface to the sixth edition London Macmillan 1922を参考にした)。
- 11 奥野満里子『シジュウツクと現代功利主義』(勁草書房 一九九九)。  
行安茂編『近代イギリス倫理学と宗教 パトラーとシジュウツク』(晃洋書房、一九九九)
- 12 拙稿「森瀧市郎研究覚書——パトラー研究と日本倫理思想との比較を中心に——」(『原爆文学研究』一九 二〇二〇・一一)。またL・ステイブンス『十八世紀イギリス思想史』(筑摩書房 一九六九 二二六頁)。
- 13 田辺元「哲学と詩と宗教」(『田辺元全集』第一三巻 四〇七頁)。
- 14 田辺元、前掲論文四〇八頁。
- 15 また田辺はカントの行為理解が「一如の叡智的存在の変様たること、宛もスピノザの実態と様態との関係に比すべきもの」という興味深い見解を述べている。ヘーゲル主義者である田辺はスピノザに対しては批判的であるが、國分功一郎はスピノザの研究者であり(『スピノザの方法』みすず書房 二〇一一)、彼の後述の中動態研究、『ドゥルーズの哲学原理』岩波書店 二〇一三)はスピノザ研究の延長線上になされている。中動態研究と田辺哲学との接続に関して、この田辺と國分の理論的前提の差異については慎重に検証がなされなければならない。田辺哲学とスピノザについては石沢要『スピノザ研究』(創文社 一九七七)、ヘーゲルとスピノザの差異については、ピエール・マシユレ『ヘーゲルかスピノザか』(新評論 一九八六)、二〇〇〇年までのスピノザ研究史について上野修・小泉義之「スピノザとメタフィジックなもの」(『批評空間』II・二五 二〇〇〇)。また、スラヴォイ・ジジエクはアルチュセル派の学者(ちなみに國分はエティエンヌ・バリバルの弟子である)がスピノザに見出している論点はヘーゲルにも見出すことができる(と述べている。スラヴォイ・ジジエク『身体なき器官』(河出書房新社 二〇〇四)、「スターリンからラカンへスラヴォイ・ジジエクに聞く」(『批評空間』No.6 一九九二)。また、田辺、三木清、高坂正頭らが参加している論集『スピノザとヘーゲル』(国際ヘーゲル連盟日本版 一九三二)ではスピノザの体系を弁証法的に読解する論がいくつか見られる。
- 16 合田正人「近迫と渦流」(『思想』二〇二二・一 一一一・一一二頁)。
- 17 田辺元、前掲論文三七六頁。合田は「此者性」を「感性と知性と」の転換点に於ける質料即形相の転換相入」と理解する田辺の論理を

「個体的本質」の問題を種の自己否定の問題にすり替え」しており、そのような「否定的媒介」を軸とした把握が「関係の非対称性、非相等性」を取り逃がす田辺の「存在の比論」の扱いにも影を落としていると論じている。合田前掲論一〇〇・一一一頁。

18 中動態に関する言語学的検討としてエミール・バンヴェニスト「動詞の能動態と中動態」(『一般言語学の諸問題』みすず書房 一九八三)、哲学的検討として國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』(医学書院 二〇一七)。國分は『原子力時代における哲学』(晶文社 二〇一九)でハイデガーの『放下』を検証しながら原子力という技術のもつ謎への「開かれ」||「放下」の必要性を論じ、それに続く付論で中動態の問題に触れている。

19 國分功一郎・熊谷晋一郎『責任』の生成 中動態と当事者研究』(新曜社 二〇二〇 六二、六三頁)。「この性」について松本卓也「自閉症スペクトラムとこの性」(鈴木國文編『発達障害の精神病理Ⅰ』星和書店 二〇一八)。

20 鬼界彰夫『ウイトゲンシュタインはこう考えた』(講談社現代新書 二〇〇三 一一四、一一一頁)。

21 國分・熊谷前掲書。綾屋の具体的な論述は熊谷晋一郎・綾屋紗月『発達障害当事者研究 ゆっくりていねいにつながりたい』(医学書院 二〇〇八)。

22 田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二六〇頁)。テオドル・W・アドルノ『パラタクシス』(『文学ノート2』みすず書房 二〇〇九)。

23 田中前掲論二六〇頁。  
24 拙稿「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「嘘」

として表象可能か——「現代詩論史」の視角から吉本隆明『「反核」異論』を読む——(『原爆文学研究』一八 二〇一九・一二)。

25 村井則夫「図式から象徴へ——田辺元とパラドクスの哲学——」(杉原靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房 二〇二〇)。

26 エミール・バンヴェニスト「動詞の能動態と中動態」(『一般言語学の諸問題』みすず書房 一九八三 一六九頁)。

27 田辺元のスピノザ解釈については前掲石沢要『スピノザ研究』に詳しく、石沢は田辺のスピノザ解釈を通時的に検証し、「個体的本質の弁証論」(一九三二)ではスピノザの「deus quatenus」に「実体と属性と様態の交互関係の弁証法的関係」(一三三頁)を認め、「マラルメ覚書」では『エチカ』の「渦流的動的統一」(一三三頁)の原動力であり、「個の転入相即の先端がdeus quatenusとしての様態であり、個体である」(二四五頁)としている。「いはば第一部から始まる降下道は第五部の終わりから向上する上昇道と出会い、上昇即降下として循環的に渦流を形作るものといはなければならない」(田辺元「マラルメ覚書」田辺元全集一三卷 一九三頁)。こうした読解からも國分のスピノザに立脚した中動態理論を田辺哲学を援用して読み替えることは可能であろう。また、「マラルメ覚書」は「必然と自由の対立的統一」(石沢三四四頁)という観点からスピノザとマラルメを結合させた書物として読むこともでき、この観点から本稿の問題設定を再考することもできるだろう。それはたとえばマラルメの影響下に自身の文学を形成した野間宏の様な作家への新たな視座の形成にもつながりうると思われる。田辺のマラルメ論についての最新の研究として立花史「田辺元における芸術作品の認知的価値——『マラルメ覚書』と象徴のインフオグラフィ



- ツクス——(杉原靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房 二〇二〇)。また、立花史『マラルメの辞書学』『英単語』と人文学の再構築(法政大学出版局 二〇一五)。
- 28 國分前掲書一八七頁。
- 29 田口茂『「転換」の論理——田辺的思考の生成と(倫理としての論理)——』(『思想』二〇二二・二)。
- 30 シジウィックの「直観」概念については前掲奥野満里子『シジウィックと現代功利主義』(勁草書房 五四・五七頁)。奥野によればシジウィックの直観主義の方法とは「我々の経験から得られるデータをきめ細かく検討し、直観に照らして候補を徐々にふるい落としていき、本當に自明と思われる直観的真理に到達していくという手法」(五六頁)である。
- 31 田口茂前掲論一六一・一六二頁。
- 32 田口前掲論一六一・一六二頁。
- 33 田辺元「ヘーゲル哲学と弁証法」『田辺元全集』第三卷 筑摩書房 一九八頁。
- 34 田辺前掲論二〇五頁。
- 35 田口茂「希望のアナクロニズム 田辺哲学における「還相」の時間的構造」(杉原靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房 二〇二〇)。
- 36 田辺元「ヘーゲル哲学と弁証法」『田辺元全集』第三卷 筑摩書房 一六八頁。
- 37 この点については拙稿「表象の危機から未来への開口部へ——田辺元と横光利一の交錯点——」(『戦間期東アジアの日本語文学』(アジア遊学)一六七) 勉誠出版 二〇一三)。
- 38 田辺元「古代哲学の質量概念と現代物理学」(『田辺元全集』第五卷 二九二頁)。
- 39 田辺前掲論二九二頁。
- 40 田辺前掲論二九二頁。
- 41 J・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く』(法政大学出版局 二〇一〇・一〇七頁)。
- 42 ヘイドン・ホワイトの「歴史のプロット化と歴史的表象をめぐる真実の問題」(『歴史の喩法』作品社 二〇一七)。
- 43 ロラン・バルト『書くことは自動詞か』(『言語のざわめき』みすず書房 一九八七)。
- 44 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』(医学書院 二〇一七 三一七頁)。同書あとがきでバンヴェニストとアーレントの名前が特筆されている。三三四・三三五頁。
- 45 細江逸記「わが国語の動詞の相 (VOICE) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」(市河三喜編『岡倉先生記念論文集』一九二八)。
- 46 國分前掲書二二三・二二五頁。
- 47 國分前掲書二一九・二二〇頁。
- 48 この「受動と能動」だけではない関係を問い直すという視座は川口隆行のいう「被害と加害のディスクリール」(川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社 二〇〇八)を問い直す視座としても有効かもしれない。國分と熊谷が彼らの本の最後で「責任」の問題を論じていること、國分が『ルカ伝』「善きサマリア人の譬」でのイエスの発言を引きつつ「ある」ではない「になる」の思想(ドゥルーズの *devenir* の思

想)に「ある種の責任をめぐる思想」(國分・熊谷前掲書 三九二頁)を見出し、熊谷がそれを受けて彼らが提案する回復プログラム「12のステップ」が「被害者としての自分と加害者としての自分」(三九九頁)をめぐる過去を振り返るものになっており、「中動態を徹底していると同時に、責任を取る主体へと生成変化するプログラムになっている」(四〇〇頁)。「過去の遮断の解除が責任の前提条件になる」(四〇一頁)と述べていることは極めて興味深い。

49 國分前掲書二五四頁。

50 國分・熊谷前掲書六六頁。

51 ドゥルーズ・ガタリ『ミル・プラトール』(河出書房新社 三〇〇頁)。

「存立平面」(plan de consistance)はスピノザに由来しドゥルーズの「内在平面」(plan d'immanence)と密接にかかわる概念である。大崎晴美『千のプラトール』における内在平面——ドゥルーズ『スピノザ 実践哲学』との関係から——(『哲学年報』九州大学文学部五八号 一九九九)。「内在平面」の概念を援用してジャン・ジュネを論じた試みとして宇野邦一『ジャン・ジュネ 身振りと内在平面』(以文社 二〇〇四)。宇野の議論に導かれて三・一一以後の「襲としてのエクリチュール」の可能性を論じたものとして拙稿「消尽の果ての未来あるいは襲としてのエクリチュール——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書——」(『原爆文学研究』一一 二〇一二年・一一)。

52 ドゥルーズ・ガタリ『ミル・プラトール』(河出書房新社 三〇三頁)。  
なお、Gilles Deleuze, Felix Guattari, Mille Plateaux (minuit 一九八〇 三二二頁)を参照した。

53 マイケル・フリード『ジャクソン・ポロック』(『ART TRACE

PRESS』61 二〇一一年)。

54 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書(その二)——『原爆文学研究』一一 二〇一二年・一一)。

55 『ミル・プラトール』では「存立平面の記号系は、とりわけ固有名と不定法の動詞、そして不定冠詞や不定代名詞によつて構成される」(三〇三頁)とされる。ちなみにこの章で扱われている主題はまさに「生成変化 devenir」である。

56 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書(その二)——『原爆文学研究』一一 二〇一二年・一一)。

57 ドゥルーズ・ガタリ『ミル・プラトール』三〇三頁。

58 合田正人「像・表徴・図式」(『水声通信 特集 J・L・ナンシー』二〇〇六・八)。

59 ハイデガー・カッシーラー『ダヴォス討論』(リキエスタの会 みすず書房 二〇〇一・一九頁)。

60 合田前掲論文五〇頁。

61 合田は「ここからさらに踏み込み、「ナンシーは、このほとんど無のタツチ (touché) に、原理主義と大量殺戮と世界をつなぐ数々の地域紛争——荒々しく軋む隣接、うめき声の連縛——を感得するよう合図と信号を送っているように思われる。逆に言う、数限りない死者が像と図式を隔てている。その裂け目が我々である」と述べる。合田前掲論文五五頁。「開示」は國分が言う「開かれ」そのものである。

62 ハイデガー・カッシーラー『ダヴォス討論』二四頁。

63 合田前掲論文五四頁。この論点をイマージュと倫理性との関連性について論じた拙稿「複数・可塑性・倫理——表象不可能性とイマージュ

ユをめぐるノートⅡ——』『Problematique』(二〇〇六・七 三七・五〇頁)。

64 木村敏『分裂病の現象学』(弘文堂 一九七五 二一四・二一五頁)。また、村上靖彦『自閉症の現象学』(勁草書房 二〇〇八)も参照。

65 小林敏明『西田幾多郎 他性の文体』(太田出版 一九九七)。

66 西の仕事についてはその文体も含めて改めて再考する必要がある。西哲学の研究として隅元忠敬『西晋一郎の哲学』(溪水社 一九九五)、衛藤吉則『西晋一郎の思想——広島から「平和・和解」を問う——』(広島大学出版会 二〇一七)、山内前掲『過剰な理想』。

67 ホワイイト前掲書二二七頁。デリダの引用はジャック・デリダ「差延」

『『哲学の余白』(上) 法政大学出版局 二〇〇七 四四頁)。

68 ホワイイト前掲書二二九頁。アウエルバツハの引用はエーリヒ・アウエルバツハ『ミノーシス——ヨーロッパ文学における現実描写』(下) (ちくま学芸文庫 一九九四 四四六・四四七頁)。ここでアウエルバツハがあげている五つの特徴(客観的事実の語り手としての作者が姿を消し、語りに事件への作者の疑いや問いかけと見える特徴が支配していることなど)は中村真一郎が二〇世紀の世界文学のナラティヴの特徴として挙げているものとほぼ同じであり(中村真一郎『現代小説の世界』講談社現代新書 一九六九)、それは三島が『美しい星』で駆使した方法とも重なる。こうした論点と三・一一以後の世界の表象可能性の問題について拙稿「過視的な終末あるいは髪の中の偶有」(『原爆文学研究』一〇・二〇二二・二二)。

69 ホワイイト前掲書二二八頁。

70 ホワイイト前掲書では第六章が「歴史のプロット化と歴史的表象をめぐる真実の問題」論文で七章が「アウエルバツハの文学史」論文である。

71 アウシュビッツと固有名の問題についてはJ・F・リオタール『文の抗争』(法政大学出版局 一九八五)。近年のワイトゲンシュタイン研究の動向については渡邊福太郎『ワイトゲンシュタインの教育学 後期哲学と「言語の限界」』(慶応義塾大学出版会 二〇一七)。

72 拙稿「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か——「現代詩論史」の視角から吉本隆明『「反核」異論』を読む——(『原爆文学研究』一八 二〇一九・二二)。

73 國分・熊谷前掲書、とくに國分のスピノザ解釈に依拠しつつ「外部からの刺激を受けながらも自閉的・内向的している変状の過程こそが当事者研究の力点が置かれる地点「当事者研究」というのは、スピノザの言うコナトウスを認めて、みずからの必然的な法則を知り、それを表現するプロセス、つまりそれを周囲に可視化するプロセスなのかもしれない」とする熊谷の発言。同書一五二、一五八頁。石沢要は「田辺哲学におけるスピノザ」で「無限様態を延長の属性に即してみれば無限多様に変化しながら常に同一にとどまる全宇宙の形貌として全一構造の動的連関を示しているのであるが、これを思惟の属性に即してみれば、各瞬間毎に消滅し創生せられる主体であり、個体の動くべき方向に集中的尖端となるものである。神に対する知的愛とはかかる集中的尖端であり、『エチカ』の体系はこれを核心として展開していくのである」(三〇九頁)と述べているが、森瀧の第一論文でのプラトン哲学解釈にはじまる「知の力」「愛の文明」論は、田辺哲学を経由したスピノザ哲学、および國分・熊谷のスピノザに裏打ちされた中動態研究によつて書き換えられるべきであろう。

74 この点について、『歴史の喩法』の邦訳者である上村忠男は訳者あとがきに相当する「ヘイデン・ホワイイトと歴史の喩法」で、鶴飼哲の『ア

ウシユビッツと表象の限界』書評(『インバクシオン』一九九四・八)での「ヒストリカル・フィールド」の前もつての形象化が歴史家の前認知的な無意識のレベルで遂行される」ことで、「けつして現前へともたらされることのない歴史の他者たちの眼差し」が浮かび上がる可能性を示唆したことを受け、それを可能とする条件は多木浩二の言う「歴史が記述化される以前の、それが可能的言説として胚胎する領域」へ戻るための「方法としての退行」(多木浩二「方法としての「退行」芸術と歴史」『思想』一九九五・一二)が必要なのではないかという興味深い指摘を行っている(上村忠男「ヘイドン・ホワイトと歴史の喩法」『歴史の喩法』二八五・二八七頁)。

75 遠藤知巳「『言説』の経験論的起源(上)」(『思想』二〇〇〇・六七〇頁)。ワイトゲンシュタインと「治療としての言語哲学」についてはポプ・ブランド『ワイトゲンシュタインとレヴィナス 倫理的・思想的思考』(三和書籍 二〇一七)。

76 鵜飼哲「死せる叡智」と「生ける狂気」(さまよえる)星の比較文学(『シヤッキ・デリダの墓』みすず書房 二〇一四 二三五頁)。  
77 ガヤトリ・スピヴァク『ある学問の死 感星思考の比較文学へ』(みすず書房 二〇〇四 七八頁)。スピヴァクがその後「感星の思考」

から距離を置いたことを述べたのち、「感星思考の方法論で「北海道文学」そのものを再定位させる作業」の必要性を述べる岡和田晃「批判的地域主義としての感星思考へ」(巽孝之監修『脱領域・脱構築・脱半球』小鳥遊書房 二〇二二)。ヴァージニア・ウルフにおける「わたしたち」と「連帯」について中井亜佐子『わたしたち』の到来 英語圏モダンズムにおける歴史記述とマニフェスト』(月曜社 二〇二〇)。岡和田と中井の試みは新たな「感星の思考」によるもうひとつの

『ミメーシス』の試みだと言っていたらう。

78 下程勇吉『天道と人道』(岩波書店 一九四二)。

79 太田可夫著・水田洋編『イギリス社会哲学の成立と展開』(社会思想社 一九七一 前編の『イギリス社会哲学の成立』の初刊は一九四八)。

80 拙稿「森瀧市郎研究覚書——バトラー研究と日本倫理思想との比較を中心に——」(『原爆文学研究』一九 二〇二〇・一二)。

81 遠藤知巳は一七世紀の普遍言語論が固有名の位置づけをできなかったこと、そうした言説空間の中にホップズも属しており、それが彼の公共的言説と私的言語とのずれを修正する「一種の言語治療の視角」につながったと述べている。遠藤知巳「『言説』の経験論的起源(上)」『思想』二〇〇〇・六)。

82 大室幹雄『新編 正名と狂言 古代中国知識人の言語世界』(せりか書房 一九七五 七七頁)。

83 大室前掲書二四五頁。

84 「トレイオポイエーシス」についてデリダは「行為遂行と事実確認との、本体のない、移植による、合同的かつ同時的な生殖」(五〇頁)、スピヴァクは「逆転を正当化するのではなくて、むしろ、遠く隔たったところから作り出す」(『ある学問の死』四九頁)、鵜飼は「二一チエのテクストに働いているようなこのような友愛の力を、constative performative でもあるような、あるいはむしろ、何らかの約定および意志を前提とするどんな performative をも超えた、したがって二一チエ自身の「力への意志」の教説さえ逸脱するような出来事として記述する」概念(鵜飼前掲書二二八頁)と説明している。

85 鵜飼前掲書二五三頁。

- 86 拙稿「物語」を「空隙」で語ること 大田洋子の「しびれ」と「たまやう」について」『原爆文学研究』一四 二〇一五・二二〇。
- 87 栗原貞子「同心円——71・イワクニ、ヒロシマ——」(初出『社会新報』一九七一年・一一・二三)のち『栗原貞子全詩編』土曜美術社二〇〇五)。この栗原の詩に対する詳細な検討として川口隆行『原爆文学という問題領域』(創言社 二〇〇八)。
- 88 真木悠介『自我の起原 定本真木悠介著作集Ⅲ』(岩波書店 二〇一二年 一四五頁)。
- 89 大澤真幸・見田宗介『二千年紀の社会と思想』(太田出版 二〇一二年 一六七頁)。この論点で三島由紀夫『美しい星』の他者性表象を論じたものとして拙稿「三島由紀夫『美しい星』再考——大島渚・吉田大八との比較を中心に——」(『近代文学試論』第五八号 二〇二〇・一一)。
- 90 田口茂前掲「希望のアナクロニズム」二五五頁。こうした「開かれ」が國分の言う「放下」とどのように関わるかは田辺とハイデガーの見直しも含め検証されなければならない。
- 91 本稿の論述から明らかだと思われるが、私が『原爆文学研究』でこれまで論じてきた問題系は本稿の論点によって一つの方向にまとめることができる。ドウルーズと田辺二元の哲学的な議論(「ミル・プラトー」「嬖」「中動態」「種の理論」「懺悔道の哲学」等)を交錯させ、それらと吉本ら日本の理論家の「喩」「修辞」をめぐる理論体系とを組み合わせながら、原爆文学や原発文学、植民地文学を読みかえていくという作業である。